

「茶太樓新聞」とその成立前史

外 崎 英 明[※]

要旨：

大正から昭和初期の弘前で「茶太樓新聞」と題する新聞が発行されていた。発行人は「茶太樓」こと古木名均（こぎな・ひとし、1886～1938）。題字で「花柳界の御用新聞」を自称していたように、その内容は花柳界が栄えた当時の地方都市弘前の街の在り方と深く関わっていた。また「資本家の奴隷雑誌」とも称し、大正デモクラシーの気風も色濃く反映されていた。だが茶太樓新聞はこれまで、学術研究の対象として取り上げられておらず、その存在は地元弘前でも広く知られているとはいえない。本稿は茶太樓新聞研究の端緒として、その基礎的情報を整理するとともに、古木名の生活環境や茶太樓新聞創刊前に古木名が執筆していた「弘前新聞」の署名記事を見ることを通して茶太樓新聞が成立に至るまでの過程を明らかにすることを目的とした。

茶太樓新聞は推計で計650号が発刊された。筆者が勤務する地方新聞社「東奥日報社」（本社青森市）と横浜市の「神奈川近代文学館」にまとまった量が残されているが、その残存率は約50%だった。

古木名は弘前新聞紙上に幅広いジャンルの署名記事を掲載。特に本名で書いた論説の多さは注目に値するものであり、中でも連載「娼婦観」に代表される、社会的弱者に寄り添った視点や、花柳界をめぐる諸問題に対して提示された倫理観には茶太樓新聞の萌芽を見て取ることができた。そして古木名の花柳界への関心は、幼少期の生育環境が花柳界と近接していたこと、そして弘前が軍都となっていく過程で、その花柳界が長じての奉公先の近くに移転していったことの、二つの偶然に強く規定されていた。つまり、茶太樓新聞は、古木名の生活環境に強い影響を受けて生まれた、非常にオリジナリティーの高い著作物であると言える。

キーワード：茶太樓新聞、古木名均、花柳界、弘前

The Chataro Shinbun and Its Pre-establishment History

TONOSAKI Eimei

Abstract：

From the Taisho era to the early Showa era, a newspaper called 'Chataro Shinbun' was published in Hirosaki. The publisher is Hitoshi Kogina (1886-1938), also known as 'Chatarō'. As the title proclaimed itself "government newspaper of the Karyukai (world of geisha)", its content was deeply related to the state of Hirosaki, a provincial city at the time when the Karyukai flourished. However, the Chataro Shinbun has not been the subject of academic research, and its

[※] とのさき えいめい 弘前大学 人文社会科学部／大学院地域社会研究科

existence is not widely known even in its hometown, Hirosaki. As a beginning of the Chataro Shinbun research, this paper organizes basic information about it, and also examines Kogina's living environment and the signature article in the 'Hirosaki Shinbun' that Kogina wrote before the Chataro Shinbun was published.

The Chataro Shinbun was published an estimated 650 issues. A large amount remains in the local newspaper company 'Too Nippo' (headquartered in Aomori City) and the 'Kanagawa Museum of Modern Literature' in Yokohama City, but the percentage of remaining number was about 50%.

Kogina wrote signed articles in a wide range of fields on the Hirosaki Shimbun. In particular, the number of articles written under his real name is noteworthy. Among them, the serialization "Shofukan" is representative, and the ethics presented to the socially vulnerable and the various problems surrounding the Karyukai. I was able to see the signs of genius of the Chataro Shinbun. Kogina's interest in Karyukai stems from the fact that the environment in which he grew up in his childhood was close to Karyukai, and that in the process of Hirosaki becoming a military capital, the Karyukai relocated to his place of apprenticeship. It was strongly determined by two coincidences. In other words, it can be said that Chataro Shinbun is a highly original work that was born under the strong influence of Kogina's living environment.

Keywords : Chataro Shinbun, Hitoshi Kogina, Karyukai, Hirosaki

I. 問題の所在と研究目的

大正から昭和初期の弘前で「茶太樓新聞」と題する新聞が発行されていた(図1)。発行人は「茶太樓」こと古木名均(こぎな・ひとし、1886~1938)(図2)。題字で「花柳界の御用新聞」を自称していたように、その内容は花柳界が栄えた当時の地方都市弘前の街の在り方と深く関わっていた。また「資本家の奴隷雑誌」とも称し、誰でも分かる誇張やうそをあえて掲げることで権力を嘲笑。紙上では芸妓の人権擁護や貴族院廃止、治安維持法批判などを展開。プロレタリア文学運動を支援するなど、大正デモクラシーの気風も色濃く反映されていた。

茶太樓新聞について書かれた先行文献で、最もまとまったものが元弘前市立図書館長の故吉村和男氏¹⁾が1998、99年、2000年の「年報『市史ひろさき』」第7~9号に掲載した『茶太樓新聞』とその周辺』である。ただ、その内容は興味深いものながら、必ずしも学術的な検討がなされているとは言いがたい。また、これまでジャーナリズム研究の対象としても、文学研究の対象としてもほぼ取り上げられておらず、日本近代文学館編『日本近代文学大事典』第5巻新聞・雑誌編』などの、全国の過去の新聞を網羅した資料などにもその名が残されていない、との指摘もある(齊藤2017)。筆者が現在、記者として勤務している青森県の地方新聞社東奥日報社(本社青森市)には、この茶太樓新聞がまとまった量で保存されているが、ほとんど活用されることはなく、その存在は地域でも一般には広く知られていないとはいえない。ただ、郷土史



図1 茶太樓新聞(大正13年1月1日第7号)
出所:東奥日報社



図2 古木名均
出所：古木名朋子氏

愛好家の中には、この新聞のデジタルアーカイブ化を望む声もある（広瀬2018）など、潜在的に人気が高い史料である。東奥日報社に勤務する筆者はこの新聞の存在を知り、現物を閲覧することで興味を持ち、弘前を中心とした地域の巷間の風俗が一定のまとまった期間にわたり詳述されている点や、大正デモクラシーの影響が地方にどのように伝播していたかを知ることができる点で、学術的に検証する価値があると確信した。歴史に埋もれたこの「茶太樓新聞」が真に地域の史料として広く活用されるためには、その全貌を明らかにする必要がある。本稿はその端緒として、茶太樓新聞の基礎的情報を整理するとともに、古木名の生活環境や、茶太樓新聞創刊前に古木名が執筆していた弘前新聞の署名記事の全体像を見ることなどを通して、茶太樓新聞成立までの過程を明らかにすることを目的とする。

II. 古木名均と茶太樓新聞の概要

古木名均は1886（明治19）年、青森県弘前市桶屋町80番地に父伝兵衛、母キヌの長男として生まれた。家業は、祖父円次郎の代から油商を営んでいたと伝わる。古木名は小学校を卒業し、同市和徳町にあった久一鳴海呉服店に丁稚奉公に入る。時期は不明だが、1897（明治30）年に上鞆師町に設立された（のちに一番町に移転）弘前新聞に入り、1915（大正4）年に元大工町に設立と同時に弘前大正報に移る。1920（大正9）年1月1日に独立して、生家の場所で「茶太樓新聞」を創刊した（表1）。

表1 古木名均関係年譜

西暦	和暦	年齢	古木名均の出来事	弘前の出来事
1886	明治19	0	5月10日、弘前市桶屋町80番地に父伝兵衛、母キヌの長男として生まれる	
1897	明治30	11	このころ、小学校を卒業して間もなく和徳町の久一鳴海呉服店に丁稚奉公に入る	弘前新聞創刊
				陸軍第8師団設置決定、遊郭街を北横町に移す県令発布
				菊池楯衛、桜1200本を弘前公園に植樹
1901	明治34	15	東京に家出する	
1905	明治38	19	このころ、母方の縁戚の娘で2歳年下のタマと結婚	
1913	大正2	27	「呑気倶楽部」を結成。このころ、弘前新聞の記者として活躍	「弘前日報」創刊
				東北地方大凶作、娘の身売り相次ぐ
				在弘宮城県人会が弘前公園にシタレザクラ250本植える（1914年説も）
1914	大正3	28	呑気倶楽部、北横町と寿町の女郎たちを集め慰安する「慰藉会」を開く	寿町の遊郭「一番楼」で女郎たちが待遇改善要求しストライキ
				北横町の遊郭「長栄楼」で虐待を受けた女郎脱走
				弘前市、西の郭に桜数百本を植樹
1915	大正4	29	「弘前大正報」創設と共に記者となる	
1916	大正5	30	呑気倶楽部、弘前公園で花見を行い話題を呼ぶ	
1918	大正7	32		第1回観桜会が弘前商工会主催で開かれる
1920	大正9	34	「茶太樓新聞」創刊	
1928	昭和3	42	メーデー参加を呼び掛ける記事を掲載する	茶太樓新聞に旧制弘前高校生だった太宰治が短歌を投稿
			市内カフェー女給の人気投票を実施する	
			富田の大火を報ずる	
1929	昭和4	43	弘前警察署取賄疑惑などを警察批判を展開	普通選挙法により市議会議員選挙が実施される
1931	昭和6	45	旧制弘前中学校（現弘前高校）嶽籠城事件を報ずる	
			「鍛冶町を解剖す」「和徳町を解剖する」などの連載読み物を掲載	
1935	昭和10	49	前年の弘前で公娼廃止を受け遊郭の沿革や盛衰を掲載	
1938	昭和13	51	古木名均逝去	
			長男古木名一郎が茶太樓新聞編集発行人に	観桜会を「時局と桜の催し」と改称し開催
1940	昭和15		新聞統制により茶太樓新聞が大正報、陸奥日報とともに弘前新聞に吸収合併	弘前観光協会が発足し新名称の「弘前の桜」を主催
1946	昭和21		古木名一郎「弘前毎夕新聞」創刊	「陸奥新報」創刊
1954	昭和29		弘前毎夕新聞終刊	報恩寺の津軽家墓地在長勝寺に移転、津軽承祐のミイラ発見
				北方警備での弘前藩士の様子を密かに書き残した「松前藩詰合日記」発見
				「広報ひろさき」創刊
				「朝日シールド」社設立

出所：吉村（1998、1999、2000）などを基に筆者作成

明治から大正にかけての本県の新聞は、1877（明治10）年に青森で発行された「北斗新聞」が初めてのもので、次いで1879（明治12）年の「青森新聞」、1882（明治15）年の「陸奥新聞」、1888（明治21）年の「東奥日報」などがある。弘前では1897（明治30）年になって、初めての新聞「弘前新聞」が創刊され、以降、1899（明治32）年に憲政本党の機関紙「北辰日報」と「弘前商報」（後に「弘前日日新聞」に改題）、1900（明治33）年に佐藤紅緑による「陸羽新報」、1907（明治40）年に「東北旭新報」が相次いで発刊されているが、「弘前新聞」「北辰日報」「弘前日日新聞」以外は長続きしなかった。

茶太樓新聞創刊号1面のトップ記事「茶太樓新聞の生れて来た理由」にはこのようにある。

「茶太樓が貧乏ながらも独立の看板を掲げて、東北北海道に将来の発展を俟つ様に成ったのは、平常から姐さん方の浅からぬご愛顧御引立に依る処と深く感謝して居ります。而して多少でも姐さん方の利益になる事は、又茶太樓の為にも利益である事を忘れた事はありませんから、常に姐さん方の為になる事ならば、何事に依らずしてみたいと思っております（中略）姐さん方は遠慮無く茶太樓新聞を利用して戴く事は茶太樓の大に希望とする處でもあり茶太樓新聞発刊の理由でもあるのです」

この記事から、茶太樓新聞は当初、広く一般に向けて発行された新聞ではなかったことが分かる。古木名は花柳界の芸妓たちを指す「姐さん」たちを得意先として、東京で仕入れた三味線の棹や糸、扇子、楊子入れ、帯締め、胴掛け、袋物などの小間物を販売していた。（吉村1998）。

弘前新聞に古木名が「茶太郎」の筆名で1908（明治41）年5月16日から同23日まで8回（1、2回目は同じ16日付掲載）に連載した「行商二日旅」の冒頭には、古木名の行商の様子がうかがわれる文章がある。

「或る時或る所で面會した或る人が私に向つて御前は風呂敷ゴロじやと申されました成程私は筆ゴロや羽織ゴロの様に弱い人を威嚇して金銭を強奪したり腕力を恃んで口ハ飲みしに歩行いたりする程非道乱暴な事は遣りたくつても遣りだけの勇氣がありませんが御世辞を振り撒き愛嬌をこぼして得意先の機嫌を取り大風呂敷を擴げては姐さん達の臍繰金を掻きさらうとするのは私の商賣でありますから何と云はれても辯解の仕様が無いのです（中略）去年の夏主人の店を引取りました翌日から風呂敷ゴロと云ふ一種の商賣に掛つたので有ります（中略）今春去る人に依頼して或る品物を東京から取り寄せて貰ひそれを得意先へ持つて廻ると意外に非常なる喝采を博しまして豫想以上の好結果を得ました（後略）」

茶太樓新聞創刊号の紙面では、市内や青森など県内はもとより札幌、小樽、旭川、函館、秋田、大館、小坂、能代などの遊郭の年賀広告が、B5判8分建てのおよそ半分ほどの紙幅を占めている。題字で「花柳界の御用新聞」を自称していたように、花柳界の芸妓たちや檀那衆などを相手に当初は年1回、正月の年賀広告を載せて発行していたが、1924（大正13）年1月1日付第7号（号数重複）以降は月刊になるなど発行頻度は高まり、内容も花柳界のみならず、市井の多様な出来事に目が向けられていくようになる。

なお、現在のところ、茶太樓新聞の発行部数などの記録は発見できていない。参考までに弘前新聞の創業当時の印刷枚数は約300枚、うち70枚は出資者への無料配布だったという。

古木名は1938（昭和13）年2月12日、胃がんで亡くなる。享年51。墓所は弘前市新寺町の本行寺にある。

その後、古木名の長男一郎が編集発行人を引き継ぐが、茶太樓新聞は1940（昭和15）年、新聞統制により弘前大正報、陸奥日報とともに弘前新聞に吸収合併。一郎は戦後の1946（昭和21）年、「弘前毎夕新聞」創刊するが、1954（昭和29）年終刊した。

現在、茶太樓新聞社があった場所では、一郎の長女で古木名均の孫に当たる古木名朋子氏が暮らしている。1936（昭和11）年2月16日生まれで、亡くなった当時まだ2歳にもなっていなかった朋子氏に、古木名均の記憶はない。ただ、朋子氏は生まれて3カ月目だった自分を大切に抱きかかえる祖父が中央に写った、観桜会の写真を大切に保管している（図3）。古木名均は、1918（大正7）年に



図3 1936年の弘前公園の観桜会（前列中央が古木名均） 出所：古木名朋子氏

始まった弘前公園の「弘前観桜会」のきっかけとなる花見を1916（大正5）年に敢行した「呑気倶楽部」の主宰者で、現在「日本一の桜」と賞賛される「弘前さくらまつり」の立役者でもあった。

次に、茶太樓新聞の残存状況を明らかにする。

茶太樓新聞は1940（昭和15）年9月まで刊行されていた。現在は東奥日報社と横浜市の神奈川近代文学館に現物がまとまって保管されている。また、弘前市立弘前図書館には、双方がマイクロフィルムとなり所蔵されている。現物の残存状況は次の通りである。（表2）

表2 茶太樓新聞の残存状況（東・東奥日報社蔵、神・神奈川近代文学館蔵）

号	東神	東神	東神	東神	東神	東神	東神	東神	東神	東神	東神
1	○ ×	51 × ○	101 × ○	151 × ○	201 × ○	251 ○ ×	301~308 × ×	351 ○ ×	401~430 × ×	451~462 × ×	501~513 × ×
2	○ ×	52 × ○	102~109 × ×	152 × ○	202 × ○	252 ○ ×	309 ○ ×	352 ○ ×	431 × ○	463 ○ ×	514 × ○
3	○ ×	53 × ○	110 × ○	153~161 × ×	203 × ○	253 ○ ×	310 ○ ×	353 ○ ×	432 × ○	464 ○ ×	515 × ○
4	○ ○	54 × ○	111 × ○	162 × ○	204 × ○	254 ○ ×	311 ○ ×	354 ○ ×	433~450 × ×	465 ○ ×	516~520 × ×
5	× ×	55 × ○	112 × ○	163 × ○	205 ○ ○	255 ○ ×	312 ○ ×	355 ○ ×		466 ○ ×	521 × ○
6	○ ○	56 × ○	113 × ○	164 × ○	206 ○ ○	256 × ○	313 ○ ×	356 ○ ×		467 ○ ×	522~524 × ×
7	○ ○	57 × ○	114 × ○	165 × ○	207 ○ ○	257 × ×	314 ○ ×	357 ○ ×		468 ○ ×	525 × ○
8	○ ○	58 × ○	115 × ○	166 × ○	208 ○ ○	258 × ×	315 ○ ×	358 ○ ×		469 ○ ×	526 × ×
9	○ ○	59 × ○	116 × ○	167 × ×	209 ○ ○	259 × ○	316 ○ ×	359 ○ ×		470 ○ ×	527 × ○
10	○ ○	60 × ○	117 × ○	168 × ○	210 ○ ×	260~267 × ×	317 ○ ×	360 ○ ×		471 ○ ×	528~626 × ×
11	○ ○	61 × ○	118~124 × ×	169 × ○	211 ○ ○	268 × ○	318 ○ ×	361~366 × ×		472 ○ ×	627 × ○
12	○ ○	62 × ○	125 × ○	170 × ○	212 ○ ○	269~300 × ×	319 ○ ×	367 × ○		473 ○ ×	
13	○ ○	63 × ○	126 × ×	171 × ○	213 ○ ○		320 ○ ×	368~382 × ×		474 ○ ×	
14	○ ○	64 × ○	127 × ×	172 × ○	214 ○ ○		321 ○ ×	383 × ○		475 ○ ×	
15	○ ○	65 × ○	128 × ○	173 × ○	215 ○ ○		322 ○ ○	384~400 × ×		476 ○ ×	
16	○ ○	66 × ○	129 × ○	174 × ○	216 ○ ○		323 ○ ×			477 ○ ×	
17	○ ○	67 × ○	130 × ○	175 × ○	217 ○ ○		324 ○ ×			478 ○ ×	
18	○ ○	68 × ○	131 × ○	176 × ○	218 ○ ○		325 ○ ×			479 ○ ×	
19	○ ○	69 × ○	132 × ×	177 × ○	219 ○ ○		326 ○ ×			480 ○ ×	
20	○ ○	70 × ○	133 × ○	178 × ○	220 ○ ○		327 ○ ○			481 ○ ×	
21	○ ○	71 × ○	134 × ○	179 × ○	221 ○ ○		328 ○ ×			482 ○ ×	
22	○ ○	72 × ○	135 × ○	180 × ○	222 ○ ○		329 ○ ×			483 ○ ×	
23	○ ○	73 × ○	136 × ○	181 × ○	223 ○ ○		330 ○ ×			484 ○ ×	
24	○ ○	74 × ○	137 × ○	182 × ○	224 ○ ○		331 ○ ×			485 ○ ×	
25	○ ○	75 × ○	138 × ○	183 × ○	225 ○		332 ○ ×			486~500 × ×	
26	○ ○	76 × ○	139 × ○	184 × ○	226 ○ ○		333 ○ ×				
27	○ ○	77 × ○	140 × ○	185 × ○	227 ○ ○		334 ○ ×				
28	○ ○	78 × ○	141 × ○	186 × ○	228 ○ ○		335 ○ ×				
29	○ ○	79 × ○	142 × ×	187 × ○	229 ○ ○		336 ○ ×				
30	× ○	80 × ○	143 × ○	188 × ○	230 ○ ○		337 ○ ×				
31	○ ○	81 × ○	144 × ○	189 × ○	231 ○ ○		338 ○ ×				
32	○ ○	82 × ○	145 × ○	190 × ○	232 ○ ○		339 ○ ×				
33	○ ○	83 × ○	146 × ○	191 × ○	233 ○ ○		340 ○ ×				
34	○ ○	84 × ○	147 × ○	192 × ○	234 ○ ○		341 ○ ×				
35	× ○	85 × ○	148 × ○	193 × ○	235 ○ ○		342 ○ ×				
36	× ○	86 × ○	149 × ○	194 × ○	236 ○ ○		343 ○ ×				
37	× ○	87 × ○	150 × ○	195 × ○	237 ○ ○		344 ○ ×				
38	× ○	88 × ○		196 × ○	238 ○ ○		345 ○ ×				
39	× ○	89 × ○		197 × ○	239 ○ ○		346 ○ ×				
40	× ○	90 × ○		198 × ○	240 ○ ○		347 ○ ×				
41	× ○	91 × ○		199 × ○	241 ○ ○		348 ○ ×				
42	× ○	92 × ○		200 × ○	242 ○ ○		349 ○ ×				
43	× ○	93 × ○			243 ○ ○		350 ○ ×				
44	× ○	94 × ○			244 ○ ○						
45	× ○	95 × ○			245 ○ ×						
46	× ○	96 × ○			246 ○ ×						
47	× ○	97 × ○			247 ○ ×						
48	× ○	98 × ○			248 ○ ×						
49	× ○	99 × ○			249 ○ ×						
50	× ○	100 × ○			250 ○ ×						

出所：東奥日報社の現物および神奈川近代文学館ホームページを基に筆者作成

東奥日報社には計157号分、神奈川近代文学館には240号分が残っている。このうち、重複しているナンバーは4号、6~29号、31~34号、205~209号、211~224号、226~244号、322号、327号、463~464号の計71号分。このため、両者それぞれでしか所蔵していないナンバーと重複するナンバー

を合わせると計326号分が残存していることになる。

残存の傾向としては、東奥日報蔵は、神奈川にはない創刊号を含め、まだ年刊だった黎明期の貴重な号が残存しているものの、創刊からわずか3年後の35号（大正15年5月号）から204号（昭和6年12月号）と、初期のナンバーが大幅に欠落。逆に、神奈川では部分的に欠落はあるものの、初期から244号（昭和7年10月2日号）までは比較的よく残っている。だがそれ以降はほぼ飛び飛びの状態です31号分が残っているのみとなっている。

つまり前半は神奈川、後半は東奥に多く残っている傾向があるが、両者を合体してみても大まかに200号台後半、300号台後半から400号台前半がブロックとして欠落しており、500号台から600号台については神奈川に計6号分が残るだけである。

また、もっとも新しい神奈川の627号が発行されたのは昭和15年4月28日号。茶太樓新聞は同年9月、時局による1市1社制で弘前新聞に吸収されるが、その間の紙面も残っていない。神奈川に残る最終盤のものから、この時期は週刊だったと思われ、5カ月ほどの間に最大20号分ぐらいが発行されていた可能性もある。このため、おおまかに見積もり、廃刊まで650号が発刊されたと仮定した場合、その残存率は東奥日報分が約24%、神奈川分が約37%。重複を除いた合算分が約50%で、全体の半数が未発見ということになる。

Ⅲ. 弘前新聞に見られる古木名均の署名記事

古木名均は茶太樓新聞を創刊する前、弘前新聞、弘前大正報の記者として取材、記事を執筆していた。弘前新聞は1897（明治30）年5月19日に東海健蔵、木村象一郎らによって創刊第1号が発行された。弘前市立弘前図書館には1906（明治39）年12月以降の弘前新聞が断続的に残されている。古木名がいつ弘前新聞に入社したかは、現時点で記録は見付けられていない。一方、辞したのは1914（大正3）年12月で、1915（大正4）年2月には同月創刊された「弘前大正報」に移る。同紙については同図書館で残存が確認できるものが1931（昭和6）年12月23日付第5965号現物と、1926（大正15）年12月2日付第4094号コピーの2点のみで、時代が外れており、古木名の痕跡は見られなかった。

よって、1906～1914年の弘前新聞から、古木名均の署名記事や、状況的に古木名が書いたと強く推認される内容の記事2)をすべて拾い、その傾向性を見ることで、茶太樓新聞創刊に至った背景を探ることとした。

最初に「茶太郎」の筆名による記事が見られるのは、1907（明治40）年8月27日付の「弘前都、逸會」である。以降、最後に古木名の痕跡が認められる1914（大正3）年12月5日付の自身の弘前新聞社退社を知らせる「謹告」まで、合計486件の署名が確認でき、その旺盛な筆力をうかがわせた。

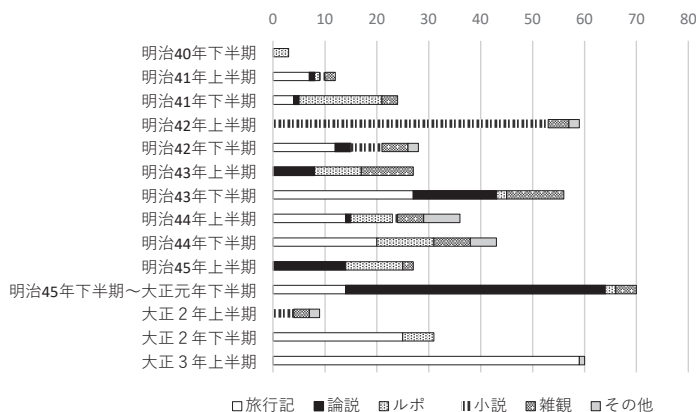


図4 弘前新聞に残る古木名均の署名記事
出所：弘前新聞を基に筆者作成

なお、当時の古木名の記事には、例えば旅行記の形を取って始まりながら、途中から道中の思索が展開されるなど、一概にジャンルを特定しがたいものも散見されたが、便宜上、主たるトーンで「旅行記」「論説」「ルポ」「小説」「雑観」「その他」の6種に分類した。

最も多かったのは「旅行記」で182本、次いで「論説」95本、「ルポ」69本、「小説」65本、「雑観」56本、「その他」19本だった。これをさらに半期ごとに分類した（図4）。

「旅行記」は署名記事が掲載された8年の間、比較的満遍なく見られ、特に最終盤の1914年3月17日付から同年6月14日付に掲載された、東京滞在記「江戸遊記」は計67回に及んだ。

明治20年代から40年代にかけて、`紀行文の時代、ともいえるような一時期が現出する。鉄道の敷設によって地方への関心が高まったこと、近代化政策の一として日本全土への地理的掌握が必要とされていたこと、日露戦争の勃発による日本全土への愛国的関心の高まりなどがその要因だったとされる（藤田1985）。古木名の旅行記も、この時代の風潮に触発されたものであるとみることができる。旅行記の目的地は、近場では青森や大鰐といった、今なら車で数十分から小一時間もあれば行けるような場所が目的地であるものも多数見られた。

「論説」については、特に1912（明治45、大正元）年下半期に集中している。これは、11月11日から30回にわたって連載（最終回が見当たらず）され、「茶太樓新聞」の大きなバックボーンともなった芸妓の存在について、古木名がどのような思考を抱いていたのかが詳述された連載「娼婦観」などの論説が多数に渡ったためである。

小説は1909（明治42）年上半期に集中しており、計22回の「ウキヨ」、計16回の「復讐」などが見られた。いずれも庶民の暮らしにテーマを求めており、中でも1909（明治42）年5月7～13日に5回連載された「穢多の娘」からは、古木名の人権意識を見てとることができる。

いずれにしても、古木名は硬軟取り混ぜ幅広い分野で健筆を振るっていることが分かり、後年独立して茶太樓新聞を創刊するだけの、新聞記者としての高い能力を示すものと言える。

また、この間、古木名はいくつかの筆名を使い分けて記事を書いている。分類すると、「茶太樓」224本、「茶太郎」128本、「茶太」4本、「五尺三寸」「五尺三寸生」「『弘前新聞』記者 五尺三寸 古木名均」（「古木名均」と3本重複）など60本、本名「古木名均」49本、「古木名胡弦」3本、「古木名生」1本（「謹告」広告主名含む）、その他（署名なし含む）19本となっている。

その変遷を見ると、当初「茶太郎」だったものが、1910（明治43）年7月25日付で初めて「茶太樓」となり、以降は直後の同年8月1、2の連載「亡き父」で2回だけ「茶太郎」が見られるものの、以降は一貫して「茶太樓」が使われている。「樓」が付き、遊郭を想起させるこの筆名を好んで用いた古木名は、後年、自身の新聞の名称にこの筆名を用いた。

「五尺三寸」は、自身の身長を示す「四尺八寸生」を筆名に用いた、雑誌「實業之世界」主筆野依秀一3）について論じた、1910（明治43）年4月12～14日付の3回連載「實業の世界社長四尺八寸野依秀一に與ふる書」で初めて「『弘前新聞』記者 五尺三寸 古木名均」として使用された。4尺8寸（約150センチ）だった野依よりも身長が高いことを誇示しながらブラックユーモアを交えて痛烈に批判した記事で、古木名は以降、好んでこの「五尺三寸」を筆名に用いた。

これらの筆名と記事ジャンルの相関を見ると、「古木名均」「古木名胡弦」「古木名生」の本名、または名字を含む筆名で書かれたもの計53本のうち、「娼婦観」の29本を中心に44本が「論説」となっており、芸妓の人権などに関する主張をする際、古木名がペンネームを避け、文責を明らかにしようとした姿勢がうかがえる。

その他の筆名で書かれた論説は「五尺三寸」が19本、「茶太樓」などその他が27本あった。「五尺三寸」については、筆名が生まれた前述の理由により、積極的な意味で論説に使用したことが考えられる。また「茶太樓」を使った論説のうち、碇ヶ関への旅行記の形を取りながら、道中の思索を論説風に展開した特殊な形態の連載「ひとはし利」（16本、第10回欠、完の記載なし）と、侠客になぞらえて新聞記者の在り方をユーモアを交え論じた「新侠客主義」（計5回）が大半を占めており、「旅行記」「雑観」などともジャンルが重複するこの2つの連載を、内容を検討した上で便宜的に「論説」に分類したため多くなったものである。

また「古木名胡弦」は中国の楽器二胡の弦に由来するものと思われ、花柳界をはじめ風流好みの古木名の詩吟などに筆名として用いられている。

IV. 「軍都弘前」が規定した古木名均の生活環境と当時の花柳界

古木名が花柳界を主な取材対象の一つとしていたのは、自身の周辺環境が強く影響したと考えられる。古木名が生まれた弘前市桶屋町80番地は、1876（明治9）年に設けられた北川端町の遊郭街や、見番、料亭があった通称「椽ノ木」（現在の弘前市本町）に近接していた（図2）。しかし、1896（明治29）年の土淵川の洪水被害と、陸軍第8師団の設置の決定が重なり、県知事は翌年、遊郭街を北横町一帯に指定する県令を出す。師団や連隊の設置により、兵士の利用が増えて遊郭が拡大すると、風紀や教育の面で不都合となり、それまで市街地にあった遊郭街が周辺部へ移転された例は全国的に京都府福知山や島根県浜田などでも見られ（松下2013）、弘前もこの事例に当てはまる。

この遊郭移転の時期と、古木名が北横町近くの和徳町で奉公していたであろう時期が重なることは注目に値する。古木名は生家でも、奉公先でも、遊郭が日常の中で身近に存在していたことになる（図5）。また、弘前が軍都となったことが、間接的に古木名の周辺環境を規定したことになったとも言えよう。遊郭移転が和徳小学校移転という社会問題を惹起し、弘前の街で耳目を集めたこと⁴も、必然的に古木名の遊郭への関心を高めることにつながったと思量される。

試みに、古木名が弘前新聞に書いたこれらの署名記事等のうち、最も芸妓らのことを中心的に論じた連載「娼婦観」の内容について分析してみる。

「娼婦観」は1912（大正元）年11月11日付から同12月27日付までの紙面に30回、途中を欠くことなく確認できた。ただし、12月26日付、27日付が共に第29回になっており、内容は異なるがナンバーが重複している。なお、最後の27日付第29回の記事に（完）など連載を完了する旨の記載はなく、翌12月28日付には記事は認められない。また、29日付から年末までは欠号、年明けの大正2年は1、2月分が全て欠号のため、この連載が計何回だったのかは不明である。

「娼婦観」はタイトルの横にこのような副題が付されている。

「奥様も讀め令嬢も讀め藝者女郎、酌婦、下女も讀め」

第1回は、この副題に沿うように、「お嬢様へ」「お三とんへ」「奥様へ」の小見出を付けた三つの章立てで、

いずれもそれぞれの立場の女性たちに語りかける形で、自身の置かれた境遇に対する不平不満を持つべきではない、そのことを知るためにこの連載を読んでほしい、と論し呼び掛ける内容となっている。

例えば「お嬢様へ」はこうである。

「お嬢さん、貴嬢は怒て居られますネ貴嬢の家は貧乏だから美しい衣服も、赤いリボンも、バイオリンも、淑女画報も買ふて貰ふ事は出来莫いもんだから怒るんでせう？（中略）併しネお嬢さん、私は其れでも貴嬢を幸福者たと思ひます、貴嬢に阿父様は有る、阿母様も兄様も有る、貴嬢は未だ米値段を知ら莫いてせう、貴嬢は毎晩温かい床の中で罪の無い夢斗り見てるんでせう、其れでも貴嬢は不足を云ふ積りならば吾儘は過きますよ

世の女の總ては決して貴嬢の様な幸福者斗りては有りません、貴嬢よりも美しい化粧をし、綺麗な衣服を着て、毎日く遊んで暮してる様な女の中には、貴嬢よりも、貴嬢は可憫相たと云てお錢を呉れた事のある乞食の娘さんよりも、ズツと不幸な女があるのです其女の何者であるかは斯稿を讀んで行



図5 弘前市内の古木名均の関連箇所
出所：弘前図書館蔵「大日本職業別明細圖之内信用案内圖 青森縣」

くと和解ります、私は貴嬢の吾儘を矯めたい爲めに是非斯稿を讀んで頂き度いのです」

連載「娼婦觀」には各回、小見出しがついている（表3）。これら小見出しに使われた言葉を使って連載に込められた古木名の主張を要約すると、「娼婦」は「社會及び個人」の「道德」「經濟」「衛生」に「害毒」を及ぼすが、彼女たちは「肉慾の満足」のために「不生産的消費」をする男たちを相手に、「生き金が爲」商売をしている「病める弱者」であり「罪惡視する」べき存在ではない、ということころにある。

表3 「娼婦觀」の小見出し

①「お嬢様へ」「お三とんへ」「奥様へ」	⑪「個人の財布も空」	⑳「民族膨張の先驅」
②「おことは利」	⑫「恐る可き亡國病」	㉑「罪惡視する勿れ」「境遇の三方面」
③「藝妓は賣淫種族」「藝者に道德なし」	⑬「花柳病の傳播力」	㉒「賣淫種族の徑路」
④「古人の一夫多妻」	⑭「花柳病の増減」	㉓「病める弱者」
⑤「肉慾の満足」	⑮「新兵と花柳病」「百人中約五人の有毒者」	㉔「嫉妬、猜疑、欺瞞」
⑥「生き金が爲めた」	⑯「淫売種族と道德」	㉕「囚はれた女」
⑦「恐る可き『美の魔力』」	⑰「道德破壊の原動力」「死せる家庭」「商人の破産」	㉖「東京附近の娼妓」「玉と娼妓の相場」「娼妓の身代金」
⑧「害毒の三方面」	⑱「雇人の不徳義」「花柳病の遺傳」	㉗「地方の娼妓」「北横町の遊郭」「娼妓の出身地」「玉の種類」
⑨「不生産的消費」	⑲「父無し兒の父」	㉘「娼妓の前借金」「借金の使途」
⑩「帝都の淫窟と統計」	㉚「賣淫種族と心中」	㉙「娼妓の給料」「娼妓の年期」「年期延長策」

出所：弘前新聞を基に筆者作成

筆者注・⑧の「害毒」とは「社會及び個人」の「道德」「經濟」「衛生」に及ぼす害毒のこと

古木名は「娼婦觀」以前の記事でも、下記のように同様の主張を繰り返している。

「芸妓は同一社會の一員で階級など、野暮を云はず吾は斯等の人々を平等に觀て同一の待遇を奉るの適當なるを思ふ。自身が芸妓を友人としていることを光榮として感泣するものなり」（1910年11月29日付連載「久しぶ利」第1回）

「婦徳廢頽は士道不振に胚胎す、賣笑國の責任者は女子に非ずして男子なり」（1912年1月1日付論説「賣笑國の新年」）

これらの倫理觀は一貫して女性たちの立場に立ったもので、茶太樓新聞創刊号トップに掲げられた前述の記事「茶太樓新聞の生れて来た理由」につながっていく。

一方、連載「娼婦觀」第2回には、「おことは利」の小見出しでこの連載を書くに至った動機について、その年の6月に刊行され、当時全国的に大きな話題をさらった、第一生命保險の設立者矢野恒太（注5）の著書「藝者論」に触発されたからだ、としている。

「私は矢野恒太と云ふ人は『藝妓論』（筆者注・「藝者論」の誤り）と云ふ本を著述した事を聞きました。私は未だ『藝妓論』を讀んだ事はありませんから其價值を知る事は出来ませんが、爾麼（そんな）著述物が出版されたと聞くと何んたか釣込まれる様な氣に成て、急に自分も書いて見たいと思ふたのです」

ベストセラーとなり、数日の間に版を重ねた同書の第3版（初版6月1日、第2版6月11日、第3版6月23日発行）の巻末には、「本書に對する新聞雑誌の批評及び之に關する記事」が緊急的に収録されている。その中には弘前新聞掲載の記事についても、下記のような記載がある。

「弘前新聞 六月十二日 藝者論の著者△粹なるかな矢野先生

六月九日國民新聞の記事を殆一字も變へず掲載せり」

國民新聞の記事を盗用したのが古木名であったかどうかは不明だが、弘前新聞が「藝者論」に強い関心を寄せていたことがうかがえる。弘前新聞と「一字も變」わからない國民新聞の記事もこの中に収録されている。國民新聞、弘前新聞双方とも、記事中で書名を「藝者論」ではなく「藝妓論」と誤記している。実際の弘前新聞では見出しも「藝妓論」である。

「藝者論」の「跋」には

「(前略) 世人は甚しく其墮落を攻撃するが、能く觀察すれば罪の大部分は周圍にありて、本人等は寧ろ憐むべきものあんらずやとの疑問を起し、藝者を中心にして道話を書いて見たいと思ひ(後略)」

とある。古木名が本当に『藝者論』を読んだ事はありませんから其価値を知る事は出来なかったかどうかは不明だが、「罪の大部分は周囲にあり」という矢野の言説と、古木名の主張とは大きく通じるところがある。

また、この連載の中に、当時の弘前の花柳界の状況が具体的にうかがえる統計をいくつか発見した。その出所はいずれも明らかにはされておらず、確実性には疑義も残るが、当時紙上で地域に公表された数字ということで学術的にも一定の史料価値があると考えられる。

①「其筋」によると、1912（大正元）年10月1カ月間、市内壽町、北横町の遊郭に登楼した客は3408人でその揚代金は8319円82銭。娼妓の数は130人で、娼妓10人に対する1日の客数は8人、娼妓1人当たりの1日の遊興費は2円6銭4厘。（第11回）

②「或る方面の確實な調査」によると、同年12月に在弘各部隊に入営した新兵で、疾病のため郷を命じられた者の数、うち花柳病患者数、その他の患者数は次の通り（表4）。（第15回）

表4 部隊別新兵疾病者数

	疾病者数	うち花柳病	その他
歩兵第31連隊	30	12	18
騎兵第8連隊	3	2	1
野砲兵第8連隊	16	2	1
輜重兵第8連隊	13	4	9

出所：弘前新聞1912（大正元）年12月9日号
野砲兵第8連隊の数字はママ

③同年5月に娼妓の性病の有無を検査、治療した病院「驅黴院（くばいいん）」が設けられてから11月30日までに検査を受けた娼妓の数は延べ3299人。入院者数は同108人、入院日数は190日、延べ日数は1013日、1日平均5人半弱の入院があることになる。娼妓の実人数は平均120人。（第15回）

④壽町と北横町の両方で同年11月現在、121人の娼妓がいるが、11月30日の検査で10人の有毒患者

を発見。入院者数は従前からの3人と合わせ13人となった。すべて花柳病患者とはいえないが、毎日病院に通う娼妓も10人以上いる。（同）

⑤北横町の遊郭に現在（筆者注・大正元年12月か）、19軒の貸座敷業者があり、その抱える娼妓は大きいところで7、8人、小さいと3人ぐらい。全部で95～96人いる。これらの出身地は3分の1強が秋田県、本県が2分の1強、山形県、新潟県、宮城県からの者は少ない。本県で最も多いのは西津軽郡出身者で24人、次いで弘前市7人、南津軽郡6人、北津軽郡5人、中津軽郡4人、青森市3人、下北郡1人。（第28回）

これらのデータは、当時、古木名が花柳界に関心を抱くに至った理由の一つに、このような花柳界の隆盛とそれに伴う花柳病の蔓延、さらにはその社会的な害悪があったことを、具体的に裏付けるものとして注目し値するといえよう。

V. 結論

古木名が「本日限り退社仕候」と弘前新聞社を辞する「謹告」を掲載した1914（大正3）年12月5日付3面には、「古木名君を送る」と題する記事が掲載されている。ここに、古木名の新聞記者としての客観的評価が示されている。

「君が記者としての生活には、毀誉相半ばし、君が麗文彩筆は褒貶相連なる、而かも君や敢て深く學徒の教育を受くる事無く、獨り自ら研鑽の功を積み、筆を以て社会に濶歩するに到り、毫も時流凡俗の云爲に耳を假さず、飽まで一定の操守に向つて奮闘せんとす、意志の強固なるに對しては、深く敬意を表せざるを得ず」

この短文は、これまで見てきた古木名の生い立ちやその異才ぶり、一徹な倫理観を簡潔かつ端的に示している。

古木名は小学校卒の低学歴ではあったものの、花柳界をはじめ、弘前の地域社会に対する旺盛な興味関心を抱き、独学で本県の新聞黎明期の代表紙の一つ弘前新聞紙上に、旅行記や論説、ルポ、小説

など、幅広いジャンルの署名記事を掲載した。その取材意欲と健筆ぶりからは、すでに茶太樓新聞創刊の萌芽とも言うべき才気がうかがえる。旅行記の数の多さが当時の流行に倣ったものであることを考慮すれば、「古木名均」の本名で書いた論説の多さは注目に値するものである。中でも連載「娼婦観」に代表される、社会的弱者に寄り添った視点や、花柳界をめぐる道徳的、経済的、衛生的な諸問題に対して提示された倫理観は、古木名の幼少期の生育環境が花柳界と近接していたこと、そして弘前が軍都となっていく過程の都市形成の上で、その花柳界が長じての奉公先に移転していったことという、二つの偶然に強く規定されていた。つまり、その延長上にある茶太樓新聞は、弘前に於ける古木名の生活環境に強い影響を受けて生まれた、非常にオリジナリティーの高い著作物であると考えられる。

一方、当時のベストセラーである、第一生命保険の設立者矢野恒太の「藝者論」の主張との類似性は、今後の検証課題としたい。

弘前の街の在り方に大きな影響を受け、その地域性を色濃く反映していると言える古木名の弘前新聞での言論は、茶太樓新聞へと受け継がれていく。茶太樓新聞の残存率は約50%と低いが、今後、テキストの検証を進め、その価値を疎明すると共に、有効活用に向けた環境整備のために何ができるのかを考えていきたい。

注

- 1) 1927年弘前市生まれ。日本大学文理学部卒。主著に「金木屋物語」「東北の電気物語」「北方警備と津軽藩」「津軽の文明開化」などがある。当時、弘前市史近・現代部会に所属していた。2000年2月に「『茶太樓新聞』とその周辺」下を掲載した「年報『市史ひろさき』」第9号の発刊を待たずして亡くなった。
- 2) 1909（明治42）年5月14日付の、自身の務めていた久一鳴海呉服店の「久一大懇親會について」に続いて同18、19日付に無署名で掲載された「久一呉服店同勤會」（2回続き）や、1911（明治44）年の黒石の開町250年祭の際に特派員として黒石に滞在した際の「特派員」名義の記事など。
- 3) 1885（明治18）年、大分県下毛郡中津町生まれ。慶應義塾商業夜学校に通い、1905（明治38）年、石山堅吉らと「三田商業界」を創刊。1908年に「實業之世界」に改題。新渡戸稲造などの要人と関係を持っては、対立して絶縁。同誌で攻撃した。電灯料3割値下げ論を発表し、同誌で東京電燈会社攻撃キャンペーンを展開、恐喝で入獄するなど、ブラックジャーナリズムの元祖と言われた。
- 4) 弘前の場合、遊郭移転先のすぐ隣に和徳小学校があったため、地元住民が反対運動を起し、和徳小学校区会が小学校移転を計画。学校敷地を6千円で売却して移転費用に充て、1898（明治31）年9月、旧和徳村俵元の現在地に移っている。
- 5) 上道郡角山村（現岡山市）に生まれる。日本生命に医員（診査医）として就職後、共済生命設立に参加、同社総支配役に就任。のち農商務省に勤務し、保険業法を起草する。また同省商工局保険課の初代課長に就任。1902（明治35）年わが国最初の相互会社第一生命を創立、以後専務取締役、社長、会長を歴任した。この間、東横、日蒲両電鉄社長、第一相互貯蓄銀行頭取、生命保険協合理事などの要職も兼任した。また「日本国勢図会」を刊行し、統計知識を国民に普及することや、三徳塾開設等、農民教育刷新などにも尽力した。

引用参考文献

- 青森県史編さん通史部会（2018）『青森県史通史編3』
- 齊藤利彦（2017）「青森の反骨の新聞 高校生の太宰も投稿」毎日新聞6月12日付東京夕刊
- 佐藤卓己（2021）『負け組のメディア史 天下無敵 野依秀一伝』岩波現代文庫
- 東奥日報社（1988）『東奥日報百年史』
- 弘前市企画部企画課（2005）『新編 弘前市史』通史編4（近・現代1）
- 弘前市企画部企画課（2005）『新編 弘前市史』通史編5（近・現代2）
- 広瀬寿秀（2018）「広瀬院長の弘前ブログ」2月15日付「歴史研究としての新聞、茶太樓新聞」
- 藤田叙子（1985）「紀行文の時代（一）—田山花袋と柳田国男—」『三田國文』No.3、pp33
- 松下孝昭（2013）『軍隊を誘致せよ 陸海軍と都市形成』吉川弘文館 pp214-216
- 矢野恒太（1912）『藝者論』博文館
- 吉村和男（1998）『『茶太樓新聞』とその周辺』上、年報『市史ひろさき』第7号
- 吉村和男（1999）『『茶太樓新聞』とその周辺』中、年報『市史ひろさき』第8号
- 吉村和男（2000）『『茶太樓新聞』とその周辺』下、年報『市史ひろさき』第9号